



「地球環境問題とは何か」

米本昌平 著

岩波新書, 1994年4月, 262頁,
620円

地球環境問題が世間の関心を集めてから既に数年が経過した。特に、本学会の会員にとっては、地球環境問題とは興味深い問題であることであろう。しかしながら、一方では、地球環境問題ほど分かりにくい問題はないことと思われる。地球環境問題に関する書物はおびただしく存在する。しかし、「地球環境問題とは何なのか?」と核心をついた疑問に答えてくれる書物は少ない。そのような疑問に答える一助になるのが、本書である。答えにくい質問にはっきり答えていると言うことは、それだけ、自分の主張をはっきりと打ち出していると言うことである。決して、それは、正しいことを意味しない。正しいか、否かは、読者自身が決める問題であろう。

内容は、序章、「地球環境問題とはどういう種類の問題か」から始まって、地球温暖化の科学論—ハンセン論文の衝撃(第1章)、東西冷戦の終焉と環境安全保障(第2章)、IPCC報告と各国の温暖化対策(第3章)、国連気候変動枠組み条約の成立とその意味(第4章)、地球サミット—その成立の意味とその後(第5章)、戦後世界体制の洗い直しと地球環境問題(第6章)、欧州の体験—環境外交の誕生(第7章)、日本の課題と進むべき道(第8章)から成り立っている。この目次から分かるように、1988年以降、爆発的に沸き起こった地球環境問題に関する世界の動向を解説した形になっている(日本の動向がほとんど取り上げられていないことが象徴的ではある)。

筆者の基本的態度は、「地球環境問題を自然科学と現代社会の中間に横たわる、政治的性格をたっぷり含んだ新しい巨大領域」と書いてある所に端的に表現されている。序章の最後に書かれているように、「地球環境問題は、自然科学(地球物理、気象、生態、海洋など)と社会科学(経済、金融、法制度、行政、国際政治など)とを一気横なぐりに融合させてしまう動機をもっており、しかも何らかのかたちで政策立案(エネルギー政策、産業構造調整、国際交渉など)とも結び付かざるを得ないものである」と言う点で、21世紀に向けての

「パラダイムの転換」を促していることは明らかである」と主張する。さらに、それらの状況が科学の側からもたらされたのではなく、「東西冷戦の終焉が地球環境問題をもたらした」状況とその後のダイナミックな国際政治の動向が記述される。この様な中では、科学者内部での議論と社会に対する発言で異なる基準を用いると言うダブルスタンダードを使い分けたハンセンの行動に対するコメントが面白い。本文中にもあるように、ハンセンの議会証言に対しては、研究者内部からも多くの批判があったことは事実である。しかし、彼の発言を契機として状況が異なる展開を見せたのも事実である。

「正しい意図から正しい結果が生じるわけではない」というのが政治学が教えるところである。逆に言えば、「意図が正しくても、結果が正しくなければ、非難される」のが政治的行為である。自ら望んだか否かは別として、生きた現実社会に対し対応せざるを得ない科学に従事する者として、「自分としては何が可能か、どのような行動を起こすことが誠実か」考えさせる書物ということが出来る。この点では、第8章の「日本の課題と進むべき道」には、評者も同感の日本の現状に関する批判が書かれている。例えば、「地球環境問題が、自然科学と社会科学の広大な研究領域と政治を結び付ける新しい課題であることは、世界中の研究者の常識である。……ところがこの領域の日本の研究者はとくに、政治というものを本能的に嫌悪し、自分は政治にむいていないがゆえにこの研究対象を選んだ、と信じている人たちが実に多い。政治に協力することは不純なことと疑わず、これに非協力に徹することで、自らの良心の証を立てようとする心の人たちである。……ここで重要なのはどんな基礎研究であれ、その政治的意義を含んだ構想力と体系性なのだが、日本の研究者の多くはその意欲を欠いている。……もし、日本が、本当に地球環境問題に取り組むのであれば、アカデミズムの根本的な解体再編が不可欠となる」という主張である。もちろん、政治と科学というのは永遠のテーマでもあり、過去において、政治と癒着したり、イデオロギーの過剰介入で学問がめっちゃめっちゃになったことを思い起こされる人もあろう(その典型的な例は、ルイセンコ学派である)。このような主張も、内容の無い空疎なスローガンと感じられる人もいることと思う。「政治的な問題に浮かれているよりは、少しは浮世から離れて学問に専心すれば」と主張される人もいよう(評者たちは、学生時代よく言われていた)。これら

に対し、「人間的にあらねばならない」と反発するのはたやすいことであろう。ただ、問題は、どの程度、自分のなかで「知行合一」出来ているか、と言う点である。このような記述に刺激されて自分の”腰の決まり方”を再点検するのもこの本の利点の一つであろう。

さらに、興味深いことがある。評者の感覚と著者の感覚が非常に近いことである。これは、著者の経歴を見て納得した。いわゆる「全共闘世代」の気分というものであろう。面識は無くとも、「時代の気分」と言うのは、その時期を過ごした若者に共有されて行くのである、ということなのであろう。もっとも、このような「若者の気分」は、古今東西繰り返されてきたはずである。現在、社会の中堅に居る「昔の若者が何をしてくれるのか？」というところが、興味の持てるところである。

最後に、科学論を論じた第1章に、2、3間違いが

あるので指摘しておこう。例えば、大気大循環モデル(GCM)を一般回帰モデルと訳してあったり、また、ハンセンの経度8度のモデルを「現在のGCMの中では高解像度のモデルに入るのだが、それでも中緯度の水平距離は約300キロメートルになる」などの記述である。また、これまでに「本格的なGCMは5系統のものが開発されているが、イギリス気象庁のモデルを除けば、すべてアメリカの研究者の手になるものである」という記述も不正確である。正しくは、「3つはアメリカにいた日本人研究者の手になるもの」と書くべきであろう。専門外の著者が気象学の論文を読んで書いているので仕方が無いとも言えるが、出版社は一度、専門家に事実を聞いてほしかった。

とはいえ、現代的な課題に対する興味を開いてくれる良書である。一読をお勧めする。

(東京大学気候システム研究センター 住 明正)

第6回 IGBP/GAIM 研究会のお知らせ

日時：1994年10月21日(金) 9:00~13:00

会場：九州大学理学部 生物学教室会議室
(箱崎キャンパス理学部3号館5階)

招待講演：

1. 久保拓弥(九州大・理・数理生物)
「森林動態のモデリング：擾乱スキームと地球変化」
2. 野田 彰(気象研究所・気候研究部)
「気象研究所大気海洋結合モデルによる二酸化炭素漸増実験」

上記の日程で第6回のGAIM研究会を開きます。今回も上記招待講演と一般講演を行う予定です。

尚、参加費などは一切不要です。

問い合わせ先：〒305 つくば市天王台1-1-1

筑波大学生物科学系

及川 武久

TEL・FAX 0298-53-6661